



吸海宿孺足大人著

本朝 水滸傳

京師 書林 發行

昭和九年九月二十日 購末

本朝水滸傳序

此の書は... 水滸傳の序文... 凡そ八十八巻... 乃の事種此五百... 此の書は... 吾友を氣絶孺足



13 95
3152
19

才章才流作戸

と。あとのた文をよむ。さうお能
あやういむわたり。又らあやも
ふつてくぬ人なを。折あ良は太
降代ゆらうては言ハ。姑は月夜は
うらうらるる。時幽ふはに後りする
さ海よなんたあゆる。是を會の
うらうら開えむ。あつうらつあえ

あひひあうてはなへよ。あつ物あう
書と作りてあは見えす。あは実よ作る
あは少く。事ハ漕舟は跡やうらうらも
あり。あつハあまど。胡々いそはうあ。
古よ本ともゆ考へ合をえ。あは母ふうら
あえむあとしつふ。讀ゆてそは言はうら
とする人の中。蓋やあ書もあ。あはうらあ

才章才流作戸

又是と水辭傳と異けしる。此も亦
と申さばよくと好し。此のふとて。う
た川色は事小とせ。書屋がわぶ系と
局とのふ。形

昭和十一年己睦月

大神太史藤原竹居加祿志田須

本朝水滸傳

目錄

卷之一

第一條

味指の翁仙女と終り百人乃子決ま
うく

第二條

太宰府の阿茶丸勅使文と弓削乃鏡
と石まわら孫の野天宮の鏡を電燈のふ

卷之二

第三條

後系倉丸石村村を奏するよりて元系
萬石八押衛を討つべし勅あり

第四條

道祖王御船にめされく道連のふ惠美
押勝殺し眞原

卷之三

第五條

を九角丸が醫を焼く并依保乃大逆
に首伏す事原

第六條

惠美押勝祖王を好なりく伊吹山よ
隠る白猪老人祖王伊あがり事原

卷之四

第七條

冬成がむきあ牧務姫次王よなる押勝
字を授く七人の物語を必くにおし自

第八條

ハ東國よく事原
和氣素人清丸勅使うけく宇佐の八幡
大神文に指づ指終りて殉る事臣勢
金丸をとり

卷之五

第九條

清丸神乃をく神奏のよありく乃後
に罪さるる巨勢金石清丸をたすく并
金丸親子三つかり死す

第十條

金丸親子清丸を約く紀伊乃温泉
志のぶ并鼻責軍書伊清く

卷之六

第十一條

守新が事羅比ゆりされく信丸金丸が
跡を遺ふ信丸が妻子金丸の痛むを
て紀保西より
山城信丸乃妻子代置みを原の目香大志
刀を遺ふ事小英人へ伊吹山より

第十二條

卷之七

第十三條

兄べのそくぬらみちとものちを
馬助が跡信丸の兄代置目く武蔵の
兄弟又偏く信丸乃妻子伊吹山より
人へく信丸のとりられをさる

第十四條

卷之八

第十五條

信丸のそくぬらみちとものちを
大將が跡信丸の兄代置目く武蔵の
兄弟又偏く信丸乃妻子伊吹山より
人へく信丸のとりられをさる

第十六條

卷之九

大將が跡信丸の兄代置目く武蔵の
兄弟又偏く信丸乃妻子伊吹山より
人へく信丸のとりられをさる

第十七條

守大伴若狭家持糧を白山よ絶る等
此の節高き刀家持の飯よ来る

第十八條

信丸を丸の首を断りてく妻にあり
とりおれく伊弉山よのり

卷之十

第十九條

人置の志緒韓白の大神合沖にかけ
系弓屋の俊雄臣書代むる

第二十條

弓屋の俊雄人置の志緒認以系弓屋
子力に主浅せふ

卷之十一

第二十一條

弓屋の俊雄人置の志緒認以系弓屋
子力に主浅せふ

第二十二條

弓屋の俊雄人置の志緒認以系弓屋
子力に主浅せふ

卷之十二

第二十三條

弓屋の俊雄人置の志緒認以系弓屋
子力に主浅せふ

第二十四條

弓屋の俊雄人置の志緒認以系弓屋
子力に主浅せふ

卷之十三

第九六條

たらしむ
ふかにけりふ

國々の弘孝良乃於よのがら英乃後もか
すく大伴宿禰書持白山よむらゝるん
とれ

第九七條

光明皇后浴室をまゝくむづらむ村来乃
人をけらひのふを合ありて皇后よみけ
かる

卷之十四

第九七條

皇后ひそかよ書持とよのねまゝくむけ

第九八條

けらたよふ英書持佐備の府女よけれ
を惜む

書持白山よむらゝるん
死に

卷之十八

第九九條

大伴宿禰家持世津とむけ立のよ
英書持が英魂あゝくおつよまみゆ
録るる神法ありらゝるん
猪虎兎身陰籠不彼の三三
奇九よまふ

第三十條

卷之十六

第九一條

石屋足元印信よりくえりてくる
其家持心國の軍兵印信よりくる
蝦夷の棟梁カミイボンデントビカラ使堂を
ゆく使印信よりくる

第九二條

...

卷之十七

第九三條

其家持印信よりくるて和を其カミイボン
デントビカラ義人をもよ
奇丸が文印信よりくる其家持松島より
くる石屋内親王をゆく其家持

第九四條

...

卷之十八

第九五條

足元よりくるトビカラに内親王を符さ
あむみトビカラ神孫の貴元をゆく
こしくくあふ

第九六條

塩焼王塩焼よりくる清香王の娘に
あふみ守印信王印射野良

卷之十九

第九七條

猪虎兄印守印信よりつけどらる其家持の
て死よりくる清香王よりくる

第九八條

卷之二十

第九條

ふかのをいぢんりちを死の若きも
不彼内親王塩路王の養をいぢんり
たまふて人くかたしこ乃がよみ姫の墓
なるぶくはる家

第四十條

うさこままん くり えんがらま
宇佐八幡のあふ天狗集家并阿曾麻呂
希の采女侍り
阿曾麻呂政務をみる并箱崎よ採女と
あく

卷之二十一

第四十一條

阿曾丸が家人素金明徳并并喜あひ代

第四十二條

殺さ原
原系清河揚を死をわくむそのは流は
にゆり位む

卷之二十二

第四十三條

法河松浦の娘ふに養家并阿曾丸
近づく

第四十四條

小治田連珠名法河よめがう重ひく昔は
阿曾丸を討むるはたあ

卷之二十三

第四十六條

金河根津新く香椎の宮よれるは

の老母もくもげくとども金明傳も
にありとよりよ行きてまよ候死候
揚生犯日本言法習ふ并珠名が毒と
に何る丸よつふ

第四十六條

卷之二十四

第四十七條

何そまろ丸
何そ丸船沈うぐく樂むあや一死
魚何る丸をうめふ
海人の男殺機傳何よまふ并男殺機よ
り代をめふ

第四十八條

卷之二十五

第四十九條

何そ丸箱傳の唐よまどか死をよつふ
何そ丸箱傳の唐よまどか死をよつふ
何そ丸箱傳の唐よまどか死をよつふ
何そ丸箱傳の唐よまどか死をよつふ

第五十條

大明人字傳



大明人字傳



本朝水滸傳卷之一

第一條

味指の氣仙女と變りて百人の子供まのうく
 飛鳥はる原に沖代志ろしめはこそ 天武天皇 ありらん
 味指の氣といふもの有りたり世乃業もあがりかば吉井の川も
 たちとく結成とろく飯飯に足沖夢と世を日さらひたり
 ありと此川の辺におく結成あつむとあひ波瀬の邊をえたり
 多ふ結成いとも考そそ大なる松の枝の乃流れかりと傳り
 ける波あね魂乃松の枝之是が知りて水の竹書ばこそ結成あ
 ぬならあそ是をさうりげく川の末へ流さむとらふ松の枝
 人のごとくわらひく日影を流さひそ家にもくかりぬとばぬ

おまやとわらひるういあがほましく持たりこればその松乃
 かつ枝より一寸そらなる原より死鬼のまひあるとみりか
 ぐらちにひくこととまきくだけきく細や死くけをひいと
 貴妃末通女と化り白江赤きおかかねる衣のうへは秋津
 ねの松とかけ知るを禱を告め薫りみる庭をこし
 かさ。とあそやめる声して神祇乃毒とらうとくけぬは
 千年れを流しんとわらふうとまきとえさくを松の枝と
 て着よあそくば枝乃なよりせあよかけく百足よおたすくと
 りハ。おねくくよ梅りく百足よまき。是をわらふを流し
 とやせハ。百足乃枝ハ松とみつうとく産る百人の子あり

といふ其ハ又いふごとく此のふゆと因ハ東通女言ふ。
 是百侯の枝ハ只今の間ニ世ハ死ニたり。百人乃びいと
 生れあんといふ言はく。さるもくも我ハかみくもむいふ
 といふあやもや侍るんとやせバ東通女言ふ。されハあはれ
 かつ枝ハ人ト生れおそく細きハその次ハの官人と生れ
 東の枝乃りそ死ハお茶生ト生れあはく。此延ハいゆき
 彼延トとあり。世の何りさ海の音を聞き。後ハ我ハ
 がむ心ハにあり集ん。その集んハ皆我子なりとわがせ。是
 がさるあやもくと皆我り。その百侯乃枝を又川の音も我
 ちく。今我と自トして此の所。やらん。ば枝あるあやもい

之。東日波ヨリ紀伊の浦系にあらはれ。及ハ風よまらせ。
 只一時ハ國中ハ浦廻をめぐり。其中ハ産國にいき。生れあるも
 べ。船夷のふゆよ生れあはく。又浦の北國ハ河をさかのり
 来く。今ハ平年ハ間ハ昔人悪人種ト生れあはく。いひ終る。海の
 そりては。とまゆに。白蛇雲き。及り。耳音の。たさ。び。
 を。地。踏。る。踏。る。死。言。山。乃。い。あり。に。あ。き。れ。う。せ。み。り。と。そ

第二條

太宰府の阿蘇丸勅許けく。弓削の流を。
 来り。茶。言。神。ト。言。乃。流。ト。言。始。たり。
 飛鳥馬。系。系。天皇。神。位。神。座。中。惟。天皇。お。流。に。張。り。た。り。ふ。に。う。り。

おたる珠敷とそりゆるし。三波をかり唱えさるるは風忽打か
て西南北方より吹のけりける。船は西風のどくその日内申の討斗
に智恵の圓なる作の儀は多く。ちるれはさるはやく大いなる
か家ねさるひよめをそれの上の沖船をさどころより急りたさるむ。
さて西軍もどや縁よりねむとて沖の力強どもよらしく押利くさ
べに馬をらゆかせせ先鋒の具とあるさるるも勇りせ申るるもた
きうち寄せ。その吹るるより自身をいよあつて。徒らどもはあわむむ
あるせうありつけといひく。難儀うちきく足掻をとるりほどふ
はなへ平段なる。高麻乃さうち越えく九里余のむと。河又遊ひる
西の討を申さるひ。西の大沖門の前より死ぬ。ささるりちりく

中門の西よりなる後陣をあらはれ。村長をもあひいせ。あつては
たまたといふ。おれの火をまのりて。たはたはた。あつくと申あられ
流見大よ其をみまわり。一沖舟と浪風沖舟のりたり。一
たを
おみおがく。そのまて。あつて。たまた。あつくと申あられ。あ
麻乃さる。沖舟はたりたりとて。強多の揚。あつて。あつて。あつ
ち。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつ
とあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつ
それく。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつ
はあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつ
これハ沖舟の船。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつ
対面の中よりあつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつ



伝後物伝うけからあき、たのむものかま楊花見をさへくちくよの沖船只今高の景
ムロトノトナキ
 ながあさるのまき、おのの俄よ沖画を汲る。又内務目も沖金の世の侍り
 とやうな。流見の流に向ひく。あれば娘がごとく。さういふ世の侍りやせらへ
 しとてあれば、流かこゆら。程はうの世の侍り。あざうがやどつうあまは
 らん。あられども、ねて梅の血くこられ、あたらあたら。沖身はけがたる世の侍り。あせんは
いのちをいいのちをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 どもそねども、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 甲は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 乙は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 丙は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 丁は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 戊は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 己は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 庚は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 辛は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 壬は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 癸は、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。

うま。白化浴衣を、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 くめたり。流画を、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 言る床は、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 又、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 年を、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 てあられ、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 てあられ、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 ちのり、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。
 うま、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。

二月、あせりかあせりか。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。あせりか、くそをい。

